

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別授承認錄第三五二號
昭和二十五年十一月廿五日印刷 昭和二十五年十二月一日發行

浄土

第十六卷

第十二號

十二月號

富士山頭の月

吉田絃二郎

受苦圖

足立俊雄

賭

博

佐藤賢順

教

えと 躰

河野敏雄

1950

12

念佛のころ

子規、「病床六尺」にいう。悪人も名號にて救わる。「……これ宗教上の大度量を見る。……彼等が精神状態は果して安心の地に在るか、或は不安を免れざるか」

救われたいとて念ずるのではない。自己の罪の深さ、その報いの恐ろしさに對する、限りなき恐怖と絶望の中にあつて、思わず口にする叫び聲、これが念佛なのである。

念佛は不安の中で唱えられねばならない。不安のないところ恐れのないところ、疑いのないところには、決して佛は現われ給わない。佛は衆生の悩み、悶え、苦しむのをみてこれを救わんとために、吾等の前に立たれるのである。自ら安固として、平然と生きる人に對しては、佛はその手をさしのべ給わない。何故ならその人が眞に安固たり得、平然たり得ているのなら、その人は既に、迷える凡夫ではなく、悟れる佛であるからである。佛に對して佛は手をさしのべることはされない。

吾等の念佛は、おののきつつ、苦しみつつ唱えられてこそ、始めて、佛の耳に通ずるのである。眞に悩み、眞に苦しむことこれが念佛する者の忘れてはならぬころなのである。

(竹中 信常)

目次

受苦圖……………足立俊雄(4)

讀經さまざま……………松濤誠廉(3)

丸山應舉幽靈の因縁……………小川淳雄(11)

富士山頭の月……………吉田絃二郎(1)

雜草……………眞野正順(21)

夜の落し物……………森正義(8)

雪と死の記録……………前田龍海(14)

新しい教育としつけ……………河野敏雄(16)

賭博……………佐藤賢順(22)

芝園だより



富士山頭の月

吉田 絃 二 郎

「長咄しいや」これは賣茶翁が、老年になつて、客の應待に飽き、自ら書して座右に掲げたといふ言葉であるが、端的卒直な、飾り氣のない感情を言ひあらはし得て面白い。世を捨てた賣茶翁も、心なき長坐の來客にはほとほと當惑したことであらう。

わたくしの先輩の哲學者はかつて、「喫茶而去」と書いて客間の楯間にかゝげた。しかし心なき客たちは額の文字に讚辭を呈するだけで、なかなか辭去することなく、つひに主の意を掬むことはできなかつた。

芭蕉翁も晩年には閉關の辭を書いて、客を謝し、世を避けてゐる。

エマースンも心なき訪客にはひどく惱まされたらしく、客を避けるために、さらに一軒の隠れ家を持つてゐた。

西行法師が芳野の奥までも入つて床を結んだのも、一つの原因は訪客の煩ひに耐へなかつたからであらう。

老若ともに明日をも知れぬ、否、次の瞬間をも知れぬ命である。その大事な關頭に臨んでゐる人生に、いかにして

「長咄し」などして暇があらう。

生きてゐる間にわたくしたちは、もつともつと本を讀まなければならぬ。もつと人生について靜觀しなければならぬ。飛驒の國袈裟山千光寺の俊乗和尚は嘘といふものを知らぬ世にも稀な有徳の人であつた。

蓮華坂といふところに毎年春になれば蓮華躑躅といふ花が咲いた。或る時、村の人が戯れて「和尚さま、蓮華坂の躑躅は溫かいで、花に背仲をあてゝごらんなされ、溫かなものでござります」と言つた。俊乗和尚は教えられるまゝに蓮華坂へたどりついて、躑躅に背をあてゝしやがんでゐた。春の光りがぽかぽかと俊乗和尚の背を溫めた。

「和尚さま、何うです？」と人が問ふた。

「なるほど蓮華躑躅は溫いのう」といつて喜んだ。和尚は春の光りが背を溫めてくれたことは忘れてゐた。

また或る時、里の者がやつて來て「和尚さま山坂をお越えになるのは難儀でせう」といつた。

「山坂を越すのは骨が折れるよ」

「和尚さま、山坂を樂に越す秘傳がござりますが教えませうか」「教えてくれ」と和尚も乗り氣になつた。

「牛や馬は樂々と山坂を越しますだ。あれは四つ足で越すからでござります。四つん這ひになつて越してごらんなされ、和尚さま」

熱心に里の男の話を聽いてゐた俊乗和尚は、袈裟山から八丁程の山坂を四つん這ひになつて登つて行つたが、この時だけは「人に教えられた通りにして坂道を登つて見たが、何うも樂ではなかつた」と人に語つた。

昔はこのやうな人もあつたであらう。

案山和尚は甲斐の國藤崎郷の人である。

寺を捨て、天目山に入り、柴を結んで庶を作り、夏冬ともに一納を穿つのみで、木の實を食ふて飢をしのいだ。かくして精進いよいよ深くして、遠近からその徳を慕ひて集まる者いよいよ多くなつた。案山はつひに自ら庵を焼き捨て、天目山から出て行つてしまつた。

案山、或る時、木曾の山中を旅してゐた。たまたま山賊があつて、案山の前に立ち塞り、「金を出せ」と迫つた。

案山は乞はるゝまゝに懷から金を出した。賊は金を受け取り重ねて、「この外に金は持たぬか」と訊ねた。

「他に一物も持たぬ」と案山は答へた。

案山は山を下り麓の宿に泊り、帶を解くはずみに、どしりと何か落ちた物のあることに氣付いた。

「しまつた」とかれはつぶやいた。かれは、もう一つ金を包んだものゝあることを忘れてゐたのであつた。

「わしは山賊に對して嘘を言ふた」と獨語したかと思ふとふたゝび木曾の山路を急いで引きかへして行つた。

山賊は焚火にあたりながら新たに旅人を待つてゐた。するとさつき山を下つて行つた旅僧が立ちもどつて來たのでにはかに、警戒する氣になつた。ところが旅僧はつかつかと近づいて來て、「わしは、うつかりして、お前に嘘を言つてゐた。わしはこゝに、もう一つ包みの金を持つてをつた。受け取つてくれ」と山賊に渡した。

山賊もさすがに旅僧の尊い心には撃たれた。山賊は、はじめて活佛に接したのであつた。

山賊はあらためて案山の弟子となり佛門に歸依し沙彌久圓といふ名をあたへられた。

案山は後、江戸に出て、深川に住んでゐた。久圓は影の形に添ふごとく、いつも案山のかたはらを離れなかつた。

案山は自ら天命のまさきに盡さんことを知り、ひそかに深川の庵をのがれ、富士山の岩窟に入り坐定した。

久圓が師のあとをしたひ富士の岩窟に駆けつけた時は、すでに案山は他界してゐた。

悲歎やるかたなき思ひの久圓は師のかたはらに趺坐し、間もなく師の後を追ふた。延寶五年仲秋名月の夜であつた。昔はこんな美しい人情も見られたものであらう。

讀 經 さ ま ざ ま

廉 誠 濤 松

お經を讀む方法には色々ある。一つ一つの言葉の意味を學問的に研究して、そのお經の中に含まれている眞理を探究しようとする所謂科學的な方法もある。これは學者ばかりでなく、現代の人達はこの本當の讀み方だと思つてゐるだらう。然しこれが讀み方の總てでは無い、支那や西藏には一切經を納めた廻轉式書棚とも云ふべき輪藏と云ふものがあつて、眞言となへながらそれを一回轉さす一切經を一度通讀したのと同じ功德があるとする讀方もあると聞いている。大磐若經の眞讀の如く導師が二三卷を正しく讀む間に他の僧侶は他の經卷を、經文となへながら、バラ／＼と一方の手から他方の手へおとして、パンとたゞいて次々に讀んで行く、虫ほし式讀み方もある。これも決して無功德とは考へられて居ない。さて降つては居寢しながら、お布施を考

へながら、またその他の妄想をしながら讀んでいるのもいる。これは勿論邪讀である。更に支那天竺では、法華經を讀むのに、周圍に、天神、龍等の八都衆が居てこれに轉法輪說法する思ひで讀む方法や、日本天竺には經文の一字々々が佛體であると云ふ觀念のものによむ方法もある。宗祖上人の如きは阿彌陀經を往生のための因として讀まれたものの様で、結局、口稱念佛と似ていると拜察することが出来る。これ等は信仰や特種な觀念即ち、教理或はあたへられた經の究極の意義を浮べて一々の言葉の意味を考へずに讀む方法と云ひ得よう。

この外更に意味を考へないものに讀書百遍意自から通ずの讀み方がある。これを讀めと師匠にあたへられて意味もわからず、説明も聞かず、唯よみ方だけを教はつて讀むのである。意味は考へようともせず自然に入るまゝにまかせるのである。これも一つの讀書三昧であつて決して無意義のものでない。本堂佛前に坐ればなほよいであらうが、その必要もない。同一の經典を讀んで／＼で讀みまくるそのうちに佛教の意味が分つて來るのが不思

議である。いつか始めの學者讀みでわからない深い佛教の意味がわかつてくる、自然に佛典にこもる寂靜味が心に充滿してくるからであらう。これは勿論仲々の難行ではある。私はこれを德者讀みと名づけた。學者は愚者讀みだと云ふかも知れぬ、今でもある乞食讀みかも知れぬが、然し無欲乞食と德者はそのまゝ通じ、へぼ學者から見れば德者は愚者ともならうから、やはり德者讀みでよからう。大磐若六百卷を始めから讀んでいつてその單調さに終い手にした一卷を壁にたゞきつけたと云ふ學者が居られた。その研學心もつて敬すべきではあるが、この經典こそ前の眞讀か德者讀みでなければ通讀は殆んど不可能であらう。ある明治初期の德者で大磐若六百卷少くとも五部に朱を入られた方を知つて居る。今かゝる愚とよばるであらう德者が少ないのは淋しい氣がする。

竹 中 信 常 著

宗教への思慕

右本會扱の出版物は、好評のため品切れとなりました。申込み打切ります。

子返しを誡めた

受苦圖

足立俊雄

福島縣白河市の常宣寺に受苦圖と名づけられる地獄相圖が一幅藏されている。地獄變相圖といつてしまえば普通にありふれたものだから少しも珍しいものではないのだが、此圖は子返しを誡めるといふ特別の目的の爲に描かれたものであり、その解説と併行して日課稱名の勸誡が行われたところに淨土宗としては見逃すことの出来ないものがある。

子返しとは赤兒もどしとも又間引きともいわれ、生れたばかりの赤兒を壓し殺したり、絞め殺したりすることであるが、生れたての赤兒を殺し返えすというところから赤兒もどしとか子返しといわれ、數多い子供を間引いて殺すというところから間引きといわれるもので徳川時代には關東や東北地方に殊に盛に行われた嬰兒殺しなのである。此の原因が那邊にあつたかはいろいろと論ぜられるところであるが、農民に對する爲政者の苛斂誅求、周期的な飢饉凶作といった事柄が積り積つて窮乏のどん底に追いやられた農村で、自らの生活を打開する窮余の策として間引といったことが半ば公然と行われたと見て差支えないと思う。

名君白河樂翁も亦此子返しの對策には色々の苦心を拂われたのであるが、僧侶の教導に依つて人心の安定を計ろうと試みたこともその一つであつたし、受苦圖の活用も亦其の政策の一翼と考えられるものである。受苦圖とは縦が四尺八寸横二尺四寸の絹本極彩色の地獄變相圖であるが、普通のものと違つて赤子戻しを誡める目的で描かれたものだから、圖の上部右手には天照大神、春日大明神、八幡大菩薩の三神を、左手には彌陀三尊を描き、その中央に縦五寸、横八寸の紺地に金泥で

十二月八日成道の日

佛となる

今を去る二千四百年前。インドのニレンゼン河のほとり、ひともとの菩提樹の陰の石上に、幾分の疲勞と苦惱の影をとどめつつも、高貴なる尊容と、屈せぬ氣概とをその眉間にたゞよわせた、一人の男がじつと坐つて瞑想に耽つていた。十二月七日の夜も更け、背後の森にも深々と夜のとぼりがたれこめて、時のたつにつれて、ついには河の水すらも、そのささやきをひそめるようになり、太古の姿さながらの静けさが、彼の體を押し包んで行つた。

彼の胸の中には、一つの想いが流れていた。

私はかつて、一世を支配する王者の門に生れ、ひねもす樂宴と娯遊に日を送り、ねがいの何一つとして兼ねず、思ひの何一つとして

佛神は照鑒し、

閻王は判斷し、

殺害の影は玻璃の面に浮ぶ。

自業自得、墜落すること矢の如し。

天に號ひ地に喚ぶも、

重苦焉んぞ免れんや。

と書いた入行の賛があり、中段の百姓家では今しも産婦が生れたばかりの赤兒を絞めつけ、老婦がこれを菰にくるもうとしているにも拘らず、~~命~~命は爐に向つたまゝ平然として煙草をくゆらせている場面、下段には産婦が、その死後地獄に下落するところから始まつて、閻魔の裁きをうけるところ、産婦の罪狀がそのまゝ淨瑠璃の鏡に寫し出されているところなど、赤兒戻しを行つた爲に受けるであろう苦難のくさくさが克明に描き出されているのである。

この受苦圖が常宣寺に現存されているについては次のような物語がある。

江戸深川靈巖寺の貞巖上人といえは後には京都知恩院の六十五世を繼ぎ、文政十年六月十八日に遷化された方であるが、元來慈悲深かゝつた貞巖上人が當時諸方に行われた赤兒戻しの惡風を歎かれて受苦圖と名づける一幅の掛物を作り、祐天大僧正の御名號など一緒に、先ず常陸地方などへ送つて、僧侶の教化と相俟つてこの惡習を矯正しようとして試みたところ、殊の外に効果があり、而も、靈巖寺が松平家の菩提寺であるところから、白川藩は豫ねてから赤子養育の御世話もあることゝて心配もいるまいが、萬一不心得の者がないとも限らないから、御藩へも受苦圖を寄附するから、この圖について因果の道理を説明すると同時に、自分の犯した罪を悔い改めた者には、日課稱名百遍以上を誓わせ、この約束が出来た者には祐天上人の御名號を一枚づゝ授與するよう實意のある僧侶に殿様からいゝ付けて欲しいということ、藩の老女龜浦まで申し出されたのであつた。そこで藩は早速この貞巖上人の奇特な志を納れ、樂翁公の内諾も得た上、貞巖上人からの申入れの實施方萬端を常宣寺の住持に任せるといふ理由書と一緒に、貞巖上人からの覺書、受苦圖、祐天大僧正の御名號千枚、同じく『念佛

遂げ得ざることのなき生活をすごした。

一日、從者をつれて町に出た。

始めの日には赤坊を、次に老人をそして、死人を、最後に悠々と迫らざる態度で歩む僧の姿を見た。

世の人は何ゆえに生れ、何ゆえに老い、何ゆえに死んで行くのか。

いかなる者といえども死の手に捉えられて、刻一刻と死に近づいている。私自身いつまで若く、いつまで生きておられよう。東の間の生命にすがつて、永劫の闇の迫るのを知らぬ恐ろしさよ。この恐ろしき死を何とか打ち破らねばならぬ。

こう思い立つて、父母を残し、妻子をすて、私は城を出で、山に入り、爾來六年刻苦修行した。然し只單なる苦行は、徒らに肉體を虐げるのみで、精神には何の變革をももたらすものでないことを知り得た。

利益記』三冊を寺社役所を通して下げ渡されたのが文化七年（一八一〇）正月の七日であつた。

そこで、當時常宣寺の住職だつた廿四世深蓮社禪譽定間は、藩の意を體して其年から翌八年にかけて城下並びに領内の村々を一應巡錫したので、その成果を文化八年三月一日附けで深川の靈巖寺、本寺常陸瓜連の常福寺、芝の増上寺等へ報告しているが、靈巖寺へ宛てたものには、寄贈された受苦圖などを頂戴したので、その年の正月廿四、五の兩日、元祖大師の御忌法要の際に、先ず白川城下の老若男女を集めて受苦圖について説得、改悔した者には日課百遍以上を誓わせた上、祐天大僧正の御名號を授與、更に近在へも同様の教化を行つたこと、それで祐天大僧正の御名號も残り少なくなつたら、常福寺を通じて更に五千枚の御名號を拜受したこと、又今年、即ち文化八年の二月十一日から閏二月一日まで約廿日の間近在の巡化も行つたが、其處では止宿の村々へ、二三ヶ村づゝの村人を集めて受苦圖の説得を行つたので、結縁の輩も相當數に上つたこと、この巡化に當つては、城主から各鄉村役人へ常宣寺に對する世話萬端が命ぜられていたので、至る處で送迎等丁寧なもてなしを受けたこと、各村とも信心の男女がお禮の爲と稱して箕笠を身につけ、雪中をも厭わずに、村から村へと大勢で高聲の念佛を稱えながら送つてくれたが、鐘太鼓を鳴らしながらの念佛だつたので、途中野山などへさしかゝつた時などは、迷い見探しかなど人に疑われた程で、念佛の利益がこうした邊鄙の山村にまで及んだのは、全く貞巖上人の廣度衆生の大願の致すところであるなどと報告されてある。

本寺常福寺へ宛てたものもこれと略同じ文面であるが、「御著述の手引草五拾卷」を贈つてくれた謝意が述べてあるのは、『子孫繁昌手引草』という、矢張り子返しを誡めた假名交りの小冊子が本寺から贈られたものであらうし、現存常宣寺本に嘉永三年（一八五〇）八月印施とあるのが、その複製であらうが、御著述とあるからには、著者はその宛先常福寺五十六世暢譽宣契を指するものと思われるが、由來この手引草には、地方に依つていろいろの異本があり、又地方を異にしても同本もあるもので、果して宣契が手引草の著者かどうか再考を要するところだが、宣契が受苦圖の勸諭に關しては親しく助言を與えたものゝようで、同じ手紙の中に「去春登山の節委細仰せきかさせられ候趣教示仕候處無心の男女感心仕候體にて聽受くる内には落涙いたし候體のものも相見え申候」とあり、又受苦圖の裏には、常福寺の役者に命じて此圖の作られた譯や、文化七年から九年までの間に、常宣寺が白河領内の各村を巡つて此圖について勸諭を行つて効果のあつたこと、この効果を更に大きくするため以

そこで私は河に入り、身を淨め
思いを新たにした。肉體を傷ける
よりは精神をねり直おし、人に求
めるよりは自分に求めることだ。
眞理は、自らの中にこそあるので
あつて、これを外に掴まんとする
ことは間違ひである。思いここに
至るや、私は大勇猛心を以つて石
上に坐を占めて、深く深く、自ら
の中に分け入つて今夜に至つた。

私は結論を得た。

「生けとし生けるもの、すべては
死にゆくもの。而もこれらの個々
の死を越えて、生命そのものは悠
久につゞいてゐる。刻々に移り變
る萬物も、そのままがまた永遠に
つらなつて盡くることない。萬物
は流れ移る。だがこの流れ移ると
いうことそのことは、永久不滅に
つゞいてゐるではないか。苦しみ
とはわれ一人が苦しむのではなく
苦しむことすべてに通じて、萬物
が苦しむのだ。われ一人が樂しむ

後五年に一度づゝ巡村教化を行ふようといつたことを記させ、自らも名號を大書してあるところからしても、宣契の力の入れようが窺われる。然し文化八年の巡錫には、手引草を引用しての勸誡は行つていないようで、「追々教示の上在所共へ仰せの如く受興」したいとか、「手引草教示の上村々一冊宛も相遣し候はゞ大勢の化益に相成るべきやと愚慮」するなどの文面はその證左である。

又増上寺の學頭寮の惠通、定學の兩人に宛てたものも、亦これと殆ど同じであるが、惠通から法然上人の法語と嘆德抄が送られ、それを活用したことを、「頂戴の御法語之教解仕候處有信の輩殊の外難有がり改悔の上日課受興之者も多く御座候」と報告しているが、この『嘆德抄』のことでは定學に宛てた文面中に、「舊多惠通上人より御隱居様御施印と御座候て元祖大師御法語並嘆德抄頂戴仰付けられ」などゝあるので、こゝにいう隱居とは増上寺五十四世超蓮社倫譽念海のことで、多分念海の著書『大師報恩嘆德疏』が送られたものであらうか。そして念海は文化五年三月に増上寺を退隱、同九年九月に寂している。更に定學に宛てた文面に、「祐天大僧正御名號再度に六千枚送られ候處此節迄に荒まし日課の者へ受興仕候義に御座候」とあるから、定間の勸誡を受けた者は、再度の巡錫だけでも約六千人ということになる。

かくて藩侯からの内達もあり、農閑期でもあつたとはいえ、二月といえは此地方では最も寒さの厳しい時だから、農村は全くの冬籠りである。此の時に敢然として勸誡の行脚を始めた定間は、行く先至る處で大歓迎を受けながら、子返しの惡習防止の説得に全力を傾け、併せて罪を犯したものでも、改悔して日課稱名を怠ることがなければ、その功德によつて極樂往生疑なしとの、念佛門の安心を説き示した精進ぶりには頭の下るものがあり、又無心の輩でも念佛門の法雨に浴したので、今更のように前非を悔い、御禮と稱して雪中をも厭わず、定間を村境まで送るなど成功裡にこの巡錫を終つてゐるのである。まこと「念佛を修せんところは、貴賤を論ぜず、海人漁人がとまやまでも、みなこれ等が道路なるべし」との法然上人の御遺誡も偲ばれる次第であるが、又この勸誡を更に意義づけるものとして、本寺常福寺は『手引草』を贈つたり、親しく助言を與えたりするし、増上寺では元祖大師の法語や嘆德抄を送るなど、奥羽という邊鄙の土地なのにも拘らず、謂ゆる血の通つた布教を冀つての努力振りも、現今の教化と較べて大に考えさせられることを附記しておく。(筆者は福島縣白河市常宣寺住職)

のではなく、萬物が樂しむ時、われもまた樂しむ。これが宇宙の眞理であり、法である。かくて、個執をすてて、愚かなる目前の繫緒を斷ち切つて、一切の中に自分を没入し、それをとおして、自分が一切となること、これが人間として眞に生きる道である」

若者の思いが、ここに至つた時十二月八日の朝が來た。世界を厚くおおつていた夜のとぼりが、心なし薄れ、はるか東天には、ほのかな明るみが浮んで來た。それに應えるように、漆黒の夜空に一點キラリとまたたく明けの明星が、彼の心の奥底にまで透み徹る光りを放つた。星は、その若者の行手を、そして更には、人類すべてが進むべき道を、はつきりと、明るく照らす如くに、輝き始めたのであつた。かくて人間の子ゴータマは、悟れる者、佛陀釋尊となつたのである。(竹中)

童話 夜の落し物

森 正 義

土曜日の晩のことでした。仲良しこども會が済んだ後で一郎さんが、みんなに申しました。

「みんないつも此お寺に集つてお話を聞いたり歌を唱つたり勉強しているけれど、何か皆で町の人達に喜んでいたゞける事をしようじやないか。」

「そうだ／＼」

「いゝわねー」

「何をしましょうか」

みんなは小さな腕を組んで考え初めました。チズ子ちゃんは手をたゞいて言いました。

「火の用心、火の用心つて夜廻りをしましょうよ」

「そうだねー。それがいゝ」

早速和尚様をお願いして「かつしやく」というお經を讀む時に使う柏子木をお借りして早速今夜から廻ることに決まりました。

「カチツカチツカチツ」と柏子木の音は焼跡の多い此町の隅々にまでひびき渡りました。

焼け残つた裸ん坊の立木を見ていると何だかお化のように見えましたが、みんなと一緒にだとも怖いとは思いませんでした。一郎さんが、

「子供に持たすなマツチ箱」というとみんなが口を揃えて、

「子供に持たすなマツチ箱」といゝます。

「魚焼いても家焼くな」カッチカッチカッチカッチ、

「出るとき寝るとき火のようじん」と大きな聲をはり上げます。

「アッあぶない」

安子ちゃんの提灯のローソクが倒れました。見る見るうちに火がついてメラメラツツと燃え出しました。

安子ちゃんがあわててはなしました。凍てついた道路の上で提灯の残りが燃えて居ります。

「火のようじん、火のようじん、と言いながらとうとう僕たちは火事を出してしまつたね。」

「氣をつけましょうね。火の用心、火の用心」

提灯の燃えてしまつた後はスツカリ静かになりました。

「あれが火星よ。今夜は火星が一番地球に近づく日なんだつて」

「アレ／＼、あの星ネ、ホーラ眞赤でしょ」

とチズ子さんが指さしました。みんな暫くの間だまつて東の空を見上げていましたが、

「あんなに赤いんで火星というんだな」

「今夜はいつもよりよけい赤いネ」

「火星には人間が住んでいないだろうけれど……人間よりもズットく賢い頭の大きな生物が住んでいるんだつてネ」

「日本は今こんなに寒い冬だけど火星は初夏のようないい氣候だつて今朝の新聞に書いてあつたよ」

みんなは柏子木をたゞくのも忘れて見ていました。その中にだんくく火星は東の山の上から木星と一緒に上つて来て光も一層輝きを増しはじめました。

「アラッ、向うから、誰か来たわ、キット三人組の強盗かも知れないわよ」

房子さんが言いましたので皆は手をつないで顔を見合せました。

三人の黒い影は段々に近づいて来ました。一郎さんと照子さんが、

「カチツカチツ」と柏子木を叩いてみんなで聲を揃えて、

「火のよーじん」と言いました。

「アー誰かと思つたら君達だつたのか」

「なーんだ。誰かと思つたら水野先生達だつたのか、房子ちゃんも強盗だなんて言うもんだから僕達ビックリしちゃつた」

水野先生は背が高いものだから腰をかゞめて、

「火の用心の夜廻りかい。御苦勞さんだね、風邪を引かないように氣をつけてやつてくれよ。三日坊主では駄目だよ。良い事は續けてやるんだよ」

「ハ―イ。雨にも風にも雪にも負けずにやります」

「えらいくしつかりやつてくれ給え。ジャさよなら」

「先生さよならッ」

皆は水野先生に教わつた光の方への歌を聲をそろえて歌い出しました。

先生達は帽子を振りながら、横町を右に曲つて行かれました。みんなは反對の松井さんの塀にそつて、又柏子木を叩きながら、

「外へ出る時火の用心」

「さかな焼いても家焼くな」と、どなりながら歩いて行きました。

「カチツカチツカチツアラッ」

「アラッ」

と小さな笑ちやんが叫んで、「あそこ、あそこ」と指さします。

「アラッ、何か泣いているよ」

「何だろう」

「何だか足がふるえて来たわ」

近づいて見ますと「ねんねこ」につままれた赤ちやんが石の上に寝かされていて、さつきから随分泣いたのでしょう。もう聲も細くなつて「ゼイゼイ」云つて泣きじやくつているのです。

「可愛想だなー」

「かあいそうにねー」

「どうしましょう」

「そうだね」

「だけどこんなに寒いところで相談していたつてしよが無いや赤ちやん何ていう名前だろう。アンアンアンと言っているよ。アンアンアンちやんて名前か」「アンアンアンちやん可愛いゝわね」

「あつたかいところへ連れて行つてあげましょうよ」

「あたい、お家へ歸つて坊やのお乳貰つて来るわ」と静ちやんが駆け出しました。「僕、乳豆持つて来る」「あたい、よだれかけ持つて来るわ」「あたい、此あめチョコ上げるわ」とポケットの中から笑ちやんは飴チョコを出して皮をむいて赤ちやんの口の中に入れました。

た。「アーンアーンアーン」と言つて泣きじやくつていた赤ちゃん
 んは甘い飴チョコが口へ入つたのでビチャ／＼させながら、小さな
 手をバタ／＼させ乍らよろこびました。みんなの中で一番大きな房
 子ちゃんが抱いて、エドモ會の會場である光明寺へ連れて行きまし
 。

「ギリギリギリッ」と大きな音のするくより戸を開けると和
 尚様がニコ／＼笑い乍ら出迎えて下さいました。

「ヤーお歸り、みんな寒かつたよろう」
 「和尚さん。たゞ今ッ」「たゞいま」「たゞいま」みんな口々に言
 いました。

「房子ちゃんそれ何處の赤ちゃんだい。可愛いゝ子だね」

「和尚さん、これ落ちていたのですよ。可愛想だから僕たち拾つて
 來ちやつた」

「どれ」子供の大好きな和尚さんは眼を細くして赤ちゃんを抱き
 上げました。

「アーン、アーン、アーン」

「此赤ちゃん。アーンアーンちゃんていうんですよ」

「アーンアーンちゃんか。ワツハツハツハ」

まるい顔をしてドンダリのような眼をした和尚さんは肥つた身體
 をゆすつてお笑いになりました。あんまり大きな聲で笑つたので赤
 ちゃんはびつくりして又泣き出しました。その中にお家にかへつた
 静ちゃん達はメイ／＼に赤ちゃんに贈り物を持つて來ました。静子
 ちゃんの手には牛乳瓶、寛ちゃんは乳豆、赤ちゃんはそれのお乳をお
 いしそうに吸つています。禮子ちゃんが可愛らしいよだれ掛けをか
 けて上げました。

「みんな此赤ちゃん。どうしよう」

「そうだなー、可愛想だから僕の家へ連れて歸ろうか」
 と寛ちゃんがいうと、

「あたいの赤ちゃんだわ」

と房子さんが云います。

「僕が一番先に見つけたんだよ」

と一郎君。みんなが口々に言うのを聞いて居られた和尚さんが、

「みんなが連れて歸つたら、きつとお父さんやお母さんがびつくり
 なさるよ」

「そんなら和尚さんにあげる」と一郎さんが申しました。

「和尚さんは子供は好きだから貰つてもいいゝが、交番のお巡りさ
 んにとゞけないといけないね」

「そんなら僕行つて來ます」「僕も」「僕も」ともう健ちゃんや寛
 ちゃん達は駆け出していました。

「誰が落したんだらうな。キット探しているよ」

「どうしましょう」「どうしよう」

と皆は腕を組んで考え始めました。

「アラッ、赤ちゃんが寝ているよ」「細い眼をしてスースー言つて
 いるよ」「こんどはスースー赤ちゃんだ」「アツハツハツハ」みん
 なは大笑いしました。一郎さんが「和尚さん硯箱借して下さいね」
 「何するの」新聞紙に一郎さんは大きな字で書き初めました。

落し物

かあいらしい赤ちゃんをひろつてあります。はじめは「アーンア
 ン」と泣きました。松井さんの塀の前の石の上です。今はスース
 ー寝ています。おとした人は光明寺へ來て下さい。仲良し子供會
 あくる朝光明寺の門の柱にこんな廣告が貼つてありました。

丸 山
應 舉

幽 靈 畫 の 因 縁

小 川 淳 雄

へわだつみの底より深き母の愛

乳房ふくます みどり子も

振分け髪の幼な兒も

文金島田につのかくし

晴れて嫁入る 生娘も

母の情の露うける

鳥の鳴かぬ 日はあれど

子を思はぬ 日とてなし

まことに廣き 母の恩

げに尊きは慈母なれや

(詞) 昔長崎寺町通りの下手、八幡町といふ所に一軒の飴屋があつた。主は年の頃五十そこゝの分別盛り、評判の氣立のいゝ人氣者「アアア今日も暮れたか、こうして毎日お蔭で商賣をさせてもらう、ありがたいことだ。

「ナマンダブ〜」と店をしめる。その夜は帳面などつけて、思はず夜を更かし、どれ寝

ようかと戸締りをしかけると、

「今晚は……」と弱々しい女の聲

「ヘイ〜、お客様でございますか、毎度ど

うも……」と戸をあけると暗闇の中から

「遅く来て済みません、飴を一文だけ下さい」

「ヘエツ一文……イヤ、ありがたうございま

す」と外を見もしないで一文の飴を差出して

ビタリと戸をしめた。

「たつた一文の飴をこの夜更けに……」と思

つたが、そこは氣のいゝ亭主そのまゝ床につ

いた。その翌晩……

夜が更け渡つて長崎名物の石疊にきしむ下駄の音も絶へて、犬の遠吠が寺町伊良林の山々にこだまする頃、

「今晚は……又飴を一文」

「ソレ來た、又一文か、仕様がネエ、夜更

けの御得意様だ」と口の内でつぶやき乍ら、手だけ出して飴を渡す。

こうして三晩、四晩と、とう〜六晩と、

いふものが、同じ刻限に、きまつたように一文の飴を買いに来る。

「飴屋の亭主は考へた、世の中には變つた事があるものだ、いかに貧乏な内とはいへ、毎晩々々一文宛の飴買いに、やつて來るとは醉狂な女、コリヤヒョットしたら、一人者のこの亭主に、氣のある何處の若後家が小あたりにチヨイ〜やつて來るのでは、あるまいか、己れも萬更の男振りではないはづ、今晚やつてお出でなすつたら、手だけ出さずに、顔を出し、とうくり見せて貰うか、そうじや〜と飴屋の亭主。

「今晚は……」

「ウヘッお出でなすつた。毎度どうも……」

とガラリと戸をあける。

「今晚はお金がありません、すみませんが、

一文だけ飴を下さい、お禮は何でもいたしま

す」

ことさらに打ちしおれた弱々しい聲。

「ようござんすよ、誰しも困つた時は、お互い様だ。さあ持つていきな」

「ご親切は忘れません、なにかご不自由な事はありますか」

「不自由といエば、おらア、かゝが居ネエのと、井戸が無いのが一番氣になつてゐるんだ

が……」

「おかみさんの代りは出来ません」

「イヤそいつは冗談で……」

「井戸はこの店の右横へ堀ると良い水がきつと出ます」

「エッ」と驚く亭主を後に、女は風のように去つて行く。

「ウム……」亭主は小首を傾けてうなづいた。

〔詩調〕毎夜一文づゝ飴を買った女、いつも夜中に時も同じく来る女、飴の禮に井戸の水を湧かせるといふ女。

〔詞〕こいつはたゞの女じゃないぞ。

「狐か狸か幽霊か、ヨシと亭主は帶引きしめなぎなた草履を引つけて、夜霧の中へ、飛び出した。

〔詞〕女の影は八幡町を過ぎて伊良林にかゝつた。寺町から續々高臺には、夜空を黒々と覆ふ巨木が、魔人の腕のようにそびえてゐる伊良林光源寺の山門が突然目の前に大入道の口のやうに迫つた。女はその中へ吸ひこまれるやうに消えて行つた。

「幽霊だ、ユーレイだ……」

飴屋の亭主は叫ぶと共に、夜の山門の敷石の上にヒツクリかえつた。

「ご亭主、氣がつかれたかの」

「飴屋どん、しつかりさつしやれ」

白髪童顔の住職と寺男の介抱で、亭主が正氣にかへつたのは太陽の光りが、張り立ての障子を通して輝やかしい翌朝の光源寺の一間であつた。

「アツこれはどうした事で……お上人様」

「お氣がつかれてよかつた。ゆうべ遅く寺のクロがあまり吠エるので勇作に見せにやるとソレお主が門の前で氣を失なうて倒れていなさつたのじや」

「お上人様くわしい話は後にしまして近頃この寺の墓地に、若い女の新佛はござらつしやりませんか」

「おゝそういわれる丁度一七日前に町家の若いご領が身重で亡くなり新墓地へ葬られてゐるのじやが」

「お上人様、御願ひでございます、一夜か二夜なら氣のまよいとも云へますが、七日も續いた間違ひのない女の幽霊、何かその棺の中に變つたことがあるに違ひはございません。貴方様のお力で一刻も早くその墓を掘つて見ようではございませんか」

それから數刻も立たない内に、人々の手で新墓は掘りかへされました。

「埋めたばかりの土饅頭」

さつと打ち込む鍬先きの

土柔かく、堀り進む

手に汗にぎる、親兄弟

かたづを呑んで飴屋の亭主

珠數つまぐりて泰然と

讀經つづけるお上人

涙の眼のその中に今ぞ現る木の寢棺世にも不思議なありさまよ。

〔詞〕棺が見えたと思うや、オギヤ／＼の勇しい赤坊の泣聲。

「ソレツ」と狂氣の様に叫ぶ人々……蓋をこじあける音メリ／＼、わつとどよめく見物人。

「おうその有様は何事ぞ」

再び浴びる陽光に

微笑む如き、若妻の

死體に匂ふ黒髪や

白一色の、よそおひは

彌陀の淨土の旅姿

その足もとに丸々と

日立ちも肥えた赤ん坊

紅葉の手足動かして、火のつく様に泣きつゝく

どつと上つた喊聲は、嘆きにあらで喜びの

(詞) この時衣の袖を十字に綾どつた上人は
佛の慈悲の兩腕に、早やくも赤兒抱き上げ
て、稱名の聲も高らかに、輝やく命の現世
の光にふれるも有難や。

(詞) 祖師法然上人にも似た白髪に住職が抱
き上げた幼な兒の右手を見たものは、ひとし
く奇異の感に打たれました。飴屋の亭主が七
日目の晩に、ほどこしたアノ一本の飴をしつ
かと握りしめ、大口あけて泣く口元には、夜
なく一文宛、浄土への旅の六文錢のある限
り母の靈が買ひ興へた飴をしやぶつた跡がハ
ツキリ残つて白く光つておりました。

「皆さん、見られたか、この御佛の御慈悲に
も似た母親の廣大無邊の恩愛を……身は亡骸
となつても、幼な兒を育て上げる一心念力は
世の諸々の母親が、皆押しなべて持つ限りな
い母性愛でありますぞ。サア御一緒に合掌念
佛申上げませう。ナムアマミダブツくくく。

物見高く集まつた心なき群集も、この光景に
心打たれて、齊しく稱名念佛する姿、朝の光
に映じて、尊くも又美しいものでした。

へ飴の御禮に魂が

指圖のまゝに掘り當てし

井戸は長崎龜屋町

今に、傳はる幽靈井戸

折りから諸國、漫遊の

その頃天下の名繪描き

丸山應舉がきゝ知つて

飴屋の亭主の見たまゝを

丹青こめて書き上げた

世にも名高き幽靈の

名畫のいはれの一説を、語り止むる次第な
り、語り止むる次第なり。(完)

新會員紹介

前回に引きつゞき今回は左記に御紹
介する多くの方々を新たに迎えまして
喜んでおります。

本誌を通じて、同じ信仰の道を歩み
得ることもつきせぬ因縁と存じます。

どうか皆様方お互の仲介の勞を本誌に
とらして頂きたく御願ひ致します。

又御紹介の勞をとつて下さつた方々
に、厚く御禮申し上げます。(敬稱略)

(カッコ内は紹介者)

高知 益直吉

京都 金光院・福谷貞覺

三重 山下法亮

福岡 江上眞純・中野朝音・浄土院・専
念寺法然上人讃仰會十名(江上秀靜)

神奈川 田中保郎・杉田義俊(藤井實應)

大阪 田中廣眞

長崎 本原義岳

北海道 鈴木靈導

東京 中野隆邦・原田留七(傳乘寺)

宮城 齋藤行信・三浦靈猷

青森 煙山智仙・高橋松海

福島 鈴木秀應

長野 松崎可定

岩手 笹坂照雄

愛知 稻生聖元

静岡 小栗光

山口 玉上ツネ(周慶寺)

広島 松井照三・榎本松太郎・五阿彌政夫

(各、別所亮讓)

雪と死の記録

前 田 龍 海

遠く of 山々が雪を冠り、歳の暮も近づく
と、私は一青年の莊嚴なる死の登山行を想い
出す。彼は松濤誠廉教授の甥に當り松濤明君
という。私も最近まで彼のいた室に起居して

いたので特に感切なるものがある。彼、農大
山岳部の精銳で關東、中部の山という山は二
百數十回に及んで踏破し、又、登山について
の研究も獨自のものを目指して精進怠りなか
つた。所が昭和二十三年十二月末から一月初
旬にかけて周到なる準備と計畫の下に友人 A
君とアルプス北鎌尾根より槍、穂高の縦走を
企てた所、北鎌の途中より A 君千丈澤側に足
をすべらせて落ち、遂に行を共にして遭難、
從容死の寸前まで手記を綴つて二十八歳の生
涯を終つた。

此の死の記録は、半身凍り感覺なえつつも

書きつづけられたもので、山岳史上空前のも
のなるのみならず、その内容について深く我
々に感銘を與えるものがある。

さて二人は長期にわたり綿密に計量し整備
した荷を背に、歳末勇躍出發した。時ならぬ
みぞれも降るといふ悪天候を衝いて登りはじ
めたが、相憎く天幕がぬれて凍り足手まとい
になつたので之を捨て、代りに雪中に洞穴を
掘る所謂スノーホールを頼りとして、日々前
進した。だが、此の尾根を襲う風雪は近年に
なき馴しさを以て情容赦もなく吹き荒れ（以
下かつこ内は手記原文）「一月五日フーセツ
（風雪）スノーホールヲ出タトタン全身バリバ
リニコオル、手モアイゼンバンドモ凍ツテア
イゼンツケラレズ、ステツブカツトデヤリマ
デ、ユカントセシモ、A 千丈側ニスリップ、

上リナホス力ナキタメ共ニ千丈ニ下ル、カラ
ミデモラツセル（積雪）ムネマデ」といふ事
態に立ち至つた。進むか退くか、生か死かの
岐路である。相當量の負荷を放置して行動の
自由を得んとしたのであるが、四、五、六日
と風雪は衰えず「全身硬ツテ力ナシ何トカ湯
俣迄ト思ウモ A ヲ捨テルニシノビズ、死ヲ決」
するに至つた。

思うに此頃よく報道されるように同行の遭
難をあとに急遽下山する例の如く、通常人な
らば、可能でないまでも最後の力のあらん限
り人はさておき、我身の保全のためにもがき
つくすことである。だが、経験も體力もある
同君だけに事の可能と不可能の限界が明晰な
る頭腦に映じ、かくて凍傷で動けぬ A の前に、
冷靜にして美しきこの判斷が下されたのであ
ろう。かくのごとく命終る時にのぞんで心願
倒せず心錯亂せざるは願うに易く行ふに難い
佛教は生老病死という苦しみを考えの出立
點として十二因縁という教を説くが、げに苦
の至極は死である。しかし、死は一切の終熄
であつて、死ぬことは苦であつても、死その
ものには苦はない。死の苦とは死を身近かに

味わい、我身體にじり／＼とまといつくを感じずる時に、ほんとうに云える言葉である。死に對する生存中の恐れ、死に至る苦しみが、死の苦である。たとえば不治の病と宣せられ自分の一日生くるは一日死に近づくことなりと細々と死を豫想しながら生くることは死の苦である。ここに追い込まれる人は理性を失いやすい。戰中、戰後しば／＼あさましい所業を耳にした。明君は、友と共に止つて明かなる死を選ぶか、去つて不明なる生を選ぶかの瀬戸際に立つて、どう考えたであらうか。

自利と利他の限界は難しく苦しい、電車が燃え出すと乗客は我を争つて他人を押しつけて出ようとする。長距離列車に坐を占めていると、老弱に席を譲るべきとわかりつつできない。當今、生きるために、即ち死なぬために人は人の爲にならぬことでも何でもといった自我的風潮が、社會惡のいづばしの尤らしい理由づけとなつてゐる。

此點、六根清淨の山に育つた同君は次のような人生觀によつて禪定に入るが如き思いに徹してゐたのである。雪皚々として吹き積る清淨の澤に、只、友と二人、乃至一人で死に

到る數刻こそは、たぐいなき涅槃への道であつた。「Aト死ヲ決シタノガ六・〇〇 今、一四・〇〇、仲々死ネナイ、漸ク腰迄硬直ガキタ、全シンフルヘ、Aモヘルツ(心臓)ソロソロクルシ、ヒグレト共ニ凡テオワラン」『サイゴマデタカフモイノチ、友ノ邊ニスツルモイノチ、共ニユク』死の苦しみは決して死の苦しみを糊塗するのみで解決されるのではない、我が生命の本然の有り方を悟ることによつて、死と對決し得る。今同君は、ふるえる手先ながら歌にのせる餘裕さえ以て、自己の人生觀を書き残していつた。「我々ガ死ンデ、死ガイハ水ニトケ、ヤガテ海ニ入り、魚ヲ肥ヤシ、又人ノ身體ヲ作ル、個人ハカリノ姿、グルグルマワル、松ナミ」とて。萬有流轉、生死一如、宇宙實相の姿を詠み出して餘す所がない。個人は假の身であり、依他起である、五大よつて成る所、散じては法界に生きて、魚を肥やし、萬物を養つて流通し、生命は行き通う。恐らくは叔父君よりの佛教の思想、大自然とあからさまに接するアルピニストの生命感、こういったものによつて生れ出たものであらう。

文面は後になるほど大文字となり苦しみを物語つてゐるが貸借關係まで心残りなく書きしるし涙なくしては讀みえない。しかも、此手記をカメラフィルムと共にバラフィン袋にいれ流失おそれなき岩陰に置いて後日全てが判り且は資料となることを念じつつ死に就いたのである。尙、フィルムは七ヶ月後死體と同時に發見し、現像せし所、死數日前の兩君の姿が現われ側々として人の胸に迫つたことだつた。

ああ、往生という字義が往いて生れるということであれば、之は往生でなくしてなんであらう。彼は山に育ち山に死し山に生きた。悟りの一内容が任運自然脱落心身とすれば、之亦悲しき悟入と申さずばなりますまい。慈悲が、身を虎餌に投じて、眞の句を聞くことならば、たおれて友の身邊に生を閉じて、我心の至上命令に耳を傾けた同君は慈愛の人であつた。かくて、私は茲に、この死記を紹介し、我々のはげみとしたい。

以上は或は表現の及ばざるが故に、同君、及び、極力大げさに扱われることを拒まれる御遺族の方々の意志に反するかも知れませんが、淨土誌ならば適當と存じますので敢て筆を執つた次第であります。

新しい教育と

し　　つ　　け

河　野　敏　雄

敗戦後五年たった今日、新教育に對しての批判が多く行われて居ります。「六・三制野球ばかりがうまくなり」とか、先生が朝児童達に今日は何を勉強しましょうかと尋ねたら児童達は口を揃えて「先生お葬式ごつこをしたいです」と答え、毎日お葬式ごつこが續いたと云う、笑えない出来事が見られるようです。これ程極端でなくても、これに似た仕事は諸所の學校で多く見られる風景です。又、「此の頃の學校は、躰の教育をしていないのだろうか、親に對して口答えばかり云い、理屈ばかりいつて、素直に云う事を聞かないで困る」との批判を父兄の方々から耳に致します。

立場を變えて、家庭を見ますと、こんな風景も見られるようです。母親は、子供に向つて「太郎やそんなにお母さんの云う事を聞かないとお父さんに云いつけますよ」と云つて父親が務めから解放されて、やれやれと我が家の玄關を入りますと、待つていましたと許り、「お父さん、太郎は此の頃少しも私の云う事を、きかないのですよ、少しは叱つて下さい」と申します。父親は「太郎お出で」と忽ち

ち呼びつけて、大聲で夕立型の叱言が始り、時には落雷もあつて、父親は權力だけを示し自分も不快になつてしまふ。又母親は五月雨型の、いつ終るとも知れない叱言をじめくつづけて居り、子供達はだまつて頭を下げて坐つて居る。形は神妙だが、心の中では、「こんな叱言は早く終ればよい、又何時もの病氣が始つたな、落雷は少しいたいが、夕立はあとがさつぱりしてよい」と考えて居るかも知れません。こんな風に、學校でも、家庭でも、新しい躰はどうしたらよいかに、頭を悩まして居る現状に思われます。そこで、新教育の立場から、躰について少しお話をしてみたいと思います。

興味について、正しい興味と、我がままとをしつかり區別の出来る先生は、上手な立派な先生であります。この區別がなか／＼出来ないうです。（後に興味について述べます）封建制の打破によつて、親の權威が大分うすくなつて、児童は自由を發見して來た事も、大きな原因の一つでしょう。教育者から言えば、敗戦の當時は、教育の目標が掴めなかつたので、自由だ興味だと言つて居るうち

に、正しい自由、正しい興味の本道から、大變に横道に入つてしまつて、迷路の鼠のようであつたとも言えます。

こんな混亂から反省状態になつて、迷路からの出口がはつきりして來て、正しい道に向つて急いで居る者、正しい道を歩き出す者の姿が、現状と言つてよいと思います。

兒童の教育で最も大切な事は、兒童を理解する事であつて、兒童達は、その發達の段階によつて、肉體的な成長の仕方、考え方、物の感じ方、運動能力、精神的活動の表現が全部違つた事を、先ず第一に考えて頂きたいのです。兒童の本來持つて居る力についても、私達が今まで考えて居た事と大分違つて居る事が、明かになり、兒童達の發達的研究が、諸外國では非常に進歩して居り、日本では、今その消化に夢中になりかけたところで

母親の胎内の四十週間の生活の間に、細胞から一個の人間に成長致しますが、これは人間の發達の姿を示して居り、新生兒から青年期になる間の、色々の精神的發達は、人類發生から現代社會までの歴史を現して居るもの

であります。

外國のある生物學者の實驗によりますと、天竺鼠の子宮を割いて、胎盤を四肢の分だけ残して取り去つて、子宮を縫い合せましたところ、立派な子鼠が生まれました。其の後、再び子宮を割いて見ると、子供は子宮から營養の多い腸の方に移動して居つた事實が報告されて居る。此の事は、母親と子供は血液的な連りではなく、母親は營養の倉庫の役を果して居り、營養を吸収する働きは、子鼠自體が持つて居る事を示して居り、人間も同様である事が考えられるのです。胎内の時から、自分で創造して新しい生命を開拓する偉大な力を持つて居るのです。赤ん坊は弱くて強いものです。親に保護をされて育つが、自ら育つ偉大な力を持つて居る事が大切な事なのです。兒童は、人に頼る依賴性と、自分から何かする自主創造性を持つて居り、此の自主創造の力を上手に育てて行くのが、親であり教師であり、教育や躾であります。新しい教育では、教師や親は、自分の持つて居るものを無理に押し付けるのではなく、兒童の持つて居る自主創造の力を、伸ばす助けをしてやる

のです。學ぶ者は、兒童自身である事をしつかりと考えて頂きたい。此の力を、兒童は生れ乍ら持つて居るのです。その力を可塑性とも言います。

そこで新教育では、興味が重要な事になつて來るのですが、なかなか難しいものなので、興味にも、一から十まであつて、一時的な氣まぐれ程度から、何處までも徹底して経験して見ようとする強いものもあるのですが、氣まぐれ程度のものにこだはりすぎると、大變なことになります。興味尊重の行きすぎはこんなところにあるようです。

興味は、兒童達の成長して行く能力や、やつて見る準備と平行して發達する傾向があると言はれて居ります。従つて、新しい教育の教育計畫では、子供の興味を無視する事は出來なくなるのです。兒童の持つて居る能力や可能性で、成熟段階になつて用いられる物に注意をはらい、その時の發達段階ではつきりと著れる目標のうちで、より大切なものと、そうでないものを、はつきり判斷する事は大切な事であります。これが立派に出來る時は、兒童自身の経験によつて、自分で選擇させ、

又その機會を多く與えてやる事が、大切であると言われて居ります。兒童の發達的研究が進んで來ました事は、前に述べたが、簡単に申しますと、兒童が兒童である權利を認める事であつて、自然は誕生から青年期までに、長い兒童期を與えて居ります。この兒童期を立派に過す事は立派な成人になるわけです。ところが、世の兩親の多くは、餘りに干涉し過ぎるようです。兒童自身が發達する力を持つて居る事は申し上げましたが、これを阻止したり、急に發達させるように、無理をして居ります。例えば、赤ん坊が六ヶ月位になつて、自分の指を口に持つてゆく努力をして居るのを見て、母親が赤ん坊の指を口の所へ届かせて居りますが、赤ん坊にとつては、大變な迷惑なのです。指の存在を發見して、口の所まで届かせる運動に興味を持つて、創造の力を働かせて居るのを、誤つた親切心から、興味を失はせ、自ら創造しようとする自主の力を失はせて、學校に行つてからも、宿題や學習を母に頼む兒童達を作り出して、「家ははどうして自分で勉強しないのでしよう」と申されて居るお母さん方は居りませんか。

又可愛いくて、這えば立ての親心から、立てようになると、手をとつて無理に歩かせて一足か二足歩けると大喜びをして、何時の間にか、足の曲つた兒童になつて居るのに、氣がつかない父親はないでしょうか。尙、その上、一足位しか歩けなかつたわが子が、或る日突然八疊の間の端から端まで歩いた事のあるのに驚かされた事もあると思います。これらは、先程申し上げた發達の段階が、歩行可能の準備が出來ると、歩きだすので、無理をしても、効少く害の多いことを物語つて居ります。歩行可能の段階になると、歩く事に興味を持つて、靜かにさせておく事が出來なくなるのです。

兒童達は、その能力や準備が出來て來ると自然に使つて見なくなるのです。それを學者は、自發的使用の原理と言つて居りますが、この力があるので、世の多くのお母さん方は、危ないと思つて、自分の思うままにしておきたい慾望にかられて居るのです。そして、兒童の經驗を無理に押える事を、躰と考へて居る方が多いのです。以上の説明で、人間の發達の過程と結びつく事が、教育、躰の面で大

切である事がわかりと思います。兒童の正しい慾求、正しい興味の實現に當つて、最善の方法を見つける事を援助し、指導する事が教師親の務であり、それを經驗するのは兒童自身であります。

發達について、今少し説明致しますと、妊娠から誕生、誕生から十二ヶ月、小學校入學迄の六ヶ年の發達は、入學後の六ヶ年の變化よりも速度が早い事は明かな事ではありますが肉體の變化發達と同様に、精神的發達の速度も早いものです。變化の速度の早い時が、教育に當つても最も大切な時であり、幼兒期の教育躰が非常に重要であるのです。従つて、兩親は最初の、そして最大の教師なのです。幼兒期の躰が學校入學後に、どんなに影響して居るかについて、考へて見る事に致しましょう。

人間は生れ乍らにして、影響を與える周圍の物に働き返す力を持つて居る事は、自主性の所で申しましたが、これが、生命の特質であるとも言えるのです。

一體、赤ん坊は、消化器のお化けの様なもので、身體中で最も發達して居るのは、消化

器系統であり、自體全體が食慾であると考え
る事も出来て、人間の本能の入口は、皮膚と
口であります。赤ん坊は、生れると乳房をす
いますが、胎内で、身體全體を接觸して居た
皮膚感覺の快さを經驗したので、親の乳房
にすいつき、食慾に結びついて居るのだと言
はれて居ります。従つて、授乳の時間は、親
が一日に何回と決めるのではなく、決定は子供
自身でするのが自然なのです。最初は、一日
に八回も飲みたがるのが、次第にへつて、一
日三回になつて我々の食事となつて来るので
す。

本能の入口に對して、知慧の入口は四つあ
ります。二つの耳、二つの目、まあ嗅覺も入
れて考えても結構です。最初に働くのは耳で
目は六十日位経たないと見えませんが、耳は
一週間もすると聞えて參ります。足音がして
母親が現れる。これが何回も繰り返されて、
足音と母親が結びついて、足音をきくと母親
と思うようになります。此の結びつけを知慧
の働きの申したらいと思ひます。皮膚と口
は肉體の世界を示して居り、絶對的であり、
絶對反射でありますが、耳目による外界との

連りは、條件反射によるもので、上手に組織
だたせ習慣づける事によつて、立派な人間を
育成出来るのであります。外界の物を認める
事も、物を掴むことも、目でその物の存在を
知り、手の運動と結びついて掴むことが出来
るのであつて、箸を握る事もその一つであり
ます。箸を握るにも、山下教授の研究により
ますと、二十種近くの握り方があり、發達段
階と結びついて居る事が明かにされて居りま
す。食事排泄の躰の問題も申し述べたいので
ありますが、紙數の關係で略させて頂きま
す。乳兒期で最も大切と思はれる離乳につい
て、少し述べる事に致します。

母親の乳房を吸ふことは、接觸の快樂が基
礎になつて居る事は前に述べましたが、躰と
しては、此の感應的快樂から、創造的活動に
よる快樂がよりよい快樂であり、此の創造的
快樂に、上手に轉換させる事が躰の最も大切
なこつてであります。よく申し上げる事であり
ますが、兒童の慾望は止める事は出来ないが
上手に方向を變化させる事は出来るのです。
何時までも、母親の胸に接觸したい慾望を、
上手に換えて行く事が、教育であり、躰であ

ります。生後七、八ヶ月になりますと乳齒が
生えます。これは離乳の準備段階に入つて來
た事を示して、その頃から、盛んに玩具を樂
しむようになって參ります。齒の生える事は
攻撃を意味して、七、八歳の永久齒の生える
時、十三、四歳の青年前期の時は、何れも滿
一歳頃と同様に、攻撃的な行動や、自己主張
の言葉を發して居り、精神的にも不安定な時
なのです。お母さん方は、赤ちゃんが離乳時
期には駄々を云ふ事を經驗なされて居る事と
思います。母親の胸にいだかれる感觸の喜び
から解放してゆく事が、母親の大切な仕事で
あります。此の時期に、親指をしやぶつたり
爪をかんだり、局部に手をやつたりしますが
母乳からはなす爲に、おしやぶりを與えるお
母さん方が見受けられますが、これは單なる
接觸による快樂感應的な快樂に長くしばらくつ
ける事で、將來、性的に早熟な青年、或は變
態性の青年になる可能性があります。此の様
にして、乳兒期を過した兒童は、學校に入つ
ても、人に甘えてだけ居て、積極的に學習を
しないようになって来るのです。此の時期に
は、兒童に興味を持つ玩具を與えて、創造的

活動による快樂に變えてゆく事が大切であります。此の時期は、物を支配し自己を主張したがりますから、積木、小動物の様なものを與えて、支配する喜びを経験し、學ばせる事により、上手に離乳する方法もよいと思います。乳兒期の玩具は、非常に大切であるので玩具については多くの學者によつて研究されて居ります。

乳兒期の玩具で大切なねらいは、口唇の快樂から、目・耳・觸感の喜びを味わせてゆくことにあると思います。赤ん坊は、玩具を直ぐに口に持つてゆくので、度々洗つてやる事が出来、適當な固さを持ち、飲みこんでしまう程小さな物であつてはならないし、ざらざらしないで、滑らかな物がよいと思われまゝ種々の感覺を働かせる爲には、色彩にとんでいて、音を出す玩具がよく、その音も氣持のよい音を出す物が望ましいのです。實驗によりますと、二種の高さの違ふ音の區別は、赤ちやんにも充分にわかるので、將來の事を考へて、異つた音を出す玩具も望ましい物です。又、こんな事も研究されて居ります。時には調子はずれの音を出す玩具を與えて經驗

させておかないと、小學校に入つてから、大變騒音に興味を持つようになる。左右の手の働きを平均させる爲には、兩手でなければ持てない大きさの玩具も必要であります。

これ等の事が、上手に親によつて助けられて居ないと、入學後依賴性が強かつたり、いつまでも先生に甘えて居つたり、友達とお話も餘り出来なかつたり、勉強の時間にも身が入らなかつたり、時々奇聲をあげたり、時間中に教室の内外を歩きまわつたりする兒童が現れて來るのです。

發達の時に、充分にその發する内容を與えておかないで、時期をはずしてしまふと、學習がむずかしくて、効果が少なくなつてしまふのです。又その時は、夢中になつて居ても、その發達の時期を過ぎてしまふと、より程度の高い物を求めて、その事はしなくなつてしまふのです。夢中になつてやつて居た事を、何時の間にか全く忘れてしまつて居るお子様に、お母さん方はお氣付の事でしよう。又その發達の時期に、その事を強く禁止致しますと、何時かはそれをやつて見たくなるのです。幼兒期には普通の行爲であつても、青年期に同様の事を行えば罪になる事が多くあるので、青少年の犯罪も乳幼兒期にその原因を發

して居る事の多いのにも御注意して下さい。

幼兒期、兒童期、青年期と申し上げたい事は澤山あるのでありますが、紙數の都合で省略致します。結局、新教育も駄も、兒童を理解して頂いて、發達に應じた經驗を上手に經驗させる事が大切であり、兒童は生れ乍ら創造性を持ち、色々の事をやつて見ては、兩親をばらはらさせて居るが、此の創造性を上手に伸ばす事が駄のこつであつて、吞氣者の兩親も、時には、はつとするような事でも上手に經驗させておかないと、大きくなつて、青年期に犯罪を犯す様にもなるのです。失敗は上手にさせてあげて下さい。小さい時に、世の多くの母親の氣に入るようにだけ駄をする、と、大きくなつて立派な社會人にはなれない。兒童は小さい時は依賴性が強いが、次第に弱くなつてゆく運命にあり、反對に創造性は益々教育によつて伸ばして、大きくなつたら、親から離れて獨立して行く事が、人間の自然なのであります。此の獨立してゆく事が、世の親達を悩ませて居るのです。徹底した家庭教育の基礎の上に、日本の教育を打ち建てる事が必要です。日本の教育の一つの悩みは此處にも存在致して居ります。(未完)

順正野眞 草 雜

人物を見抜くといふことは、非常に難かしい事だ。學問上の能力だと、非常な専門違いでないかぎり、すこし違つて話をしていれば、たいていは見當がつく。どんとぶつかつて來るのを、がつしりと受けとめ、少しゆさ／＼揺ぶつて見れば、大抵の見當はつくもので、大した間違ひはないものである。

然し、その人物となると、なか／＼むづかしい。私なぞは、しばしば誑されてばかりいる。甚しいのは、なん年も経つて、それが、いよ／＼馬脚を現はしはじめたので、やつと氣がつくといふ緩慢さである。これは、一體どうしたらよいのか。人の書いた人物評なぞを見ると、ずいぶん、人を知るに自他とも許している人でも、必ずしも、常に、その人物を見抜いている譯ではない。

それなら一體どうしたらよいのか。私も、これから、だん／＼老境に入るから、これからは一時の感情に動かされて、ものを見ることが多くなり、それだけ、人物觀はかへつて曇り、後退してゆくかも知れぬ。只今までのところを回顧して、何か人を見る規準を見出しておきたいやうな氣がする。それも決局は當らぬものがあらうが。私は、近頃、人物を見るのも、やはり藝術作品を見るのと同じも

のではないか、と思ひはじめている。

藝術の鑑賞眼を養ふには、まづよきものを見るにある。そのやうに、人物もまたそのよきものに、しば／＼接することが、眞に見る眼を養ふのではないか。

結局よい人物のほかは知る必要はないのだ。藝術も同じだ。よいものを知れば、それによつて悪いものはすぐ判る。善惡の段階は容易く明瞭となる。しかし藝術はまとまつたものであるから、そこに固定と限界が存する。しかし人物は常にそれとともに動き、それとともに生きていくところが違ふ。ともに交際している間に、私がその人の美點をひき上げたり育て上げる場合もある。又、私がそれによつて私の過惡を悔い、美點を回復し、それを生長させる事がある。たえず上下動揺している。

あの、映畫なども、よい作品となると、中の動きの深い倫理性は勿論、少しの斷片的な叙景などでも私達の心の中に眠つてゐる美的感覺をよびさましてくれる、そういう作品にばかり觸れておれば、私の人生は華やかによくなるにきまつてゐる。

そのように人々の交際でもたえず斷片的にでもその美しい所が、隠見し、そのたびに教えられ感激せしめられていれば、どんなによい事だらう。

その意味で今私の心になふ友人が現實にこの身邊にいななくても、私に浮ぶ美しいものは、やはり叙述して世に残すべきであるとも考える。それを通じてどこかに友人ができ、また若干の人を高めてくれるかも知れない、必ずしも完成の形でなくてもいい、斷片でも。

賭博

法然上人法語私釋(八)

佐藤賢順

往生は一定と思えば一定なり、

不定と思えば不定なり。(勅修御傳卷第二十一)

終戦後、世相の移り變りは何によらず甚だしいけれども最も大きな變り方の一つは賭博行政でしよう。一種の賭博行爲である寶くじだの競輪が盛んに行われ、地方の都市が競輪の収入を財政の基本にして、これで學校を立てるといふような異様な行政が行われるようになりました。競輪の収入で立てた學校で教育されている子供が、三輪車で競輪のまねをして、大きくなると競輪場のボスになる、そしてますます競輪を盛んにする、するとまたその収入で學校が立つ……という因果關係が、實際に行われるとしても少しも不思議はないでしよう。

博打に對する考え方は、西洋とわが國とは多少變つていました。わが國では奈良朝時代に、すでに博打は禁じられていました、すつと江戸時代に至るまで、惡徳とされ

ていて、これを犯した者は遠島に處せられたことさえありますが、西洋ではこれに對してそれほど嚴格な倫理觀を持つてはいません。公然と賭博が認められて、その税金のやうなものが國の收入となつて國家財政の一部となつていふやうな國もあります。ホグベンの「百萬人の數學」によると、海上保險や生命保險は十四世紀から十五世紀に始まつた制度であるが、初めは投機と手に手を取つて生育した紛れもない賭博であつたといふます。海上の危險の多かつたその頃、賢明な商人は一部の財産を提供して、全部を保證してもらおうとしたのが保險の始りですし、誰れ／＼が病氣だか死ぬだらうか癒るだらうか、といふやうなことで賭けができるし、どこそこの家では近いうち子供が生まれるが、男か女か、といふやうな他愛のないことでも賭けが

できる。人間の生命や出生がたゞちに賭博になつたというのです。今では電車を待つ間に、こんど来る電車の番號は奇數か偶數か、というような事でも賭けをしている連中があるそうです。それほどに賭博は、恐らく人間の歴史とともに古く、また人間性そのもの、深みに巢を食つてゐる習癖でしよう。

或る日、友人のN氏が來訪していろいろと話の末に賭博の話がでて、珍らしい見聞を傳えてくれました。今もなお昔ながらのやり方で行われている博打うちのチョーハン賭博の賭場へ紛れ込んで、大賭博の現場を見てきたという話は、興味深いものであつたばかりでなく、人間が運命の打開を、丁が出るか半がでるか、全く思案を超えた偶然に託しようとする究きつめた情景が眼前に浮んでくるのでした。偶然に託するよりほかに人生を切り拓く道を知らない弱々しい性格の人の、寶くじを買う氣持なども、通ずる所があるのでしょうか。そこで、話は、一たい賭博と遊戲との區別はどこにあるだろうか、ということになりました。N氏は賭博と遊戲の區別は、職業的になつてこれで食つていくか、それともこれを楽しむか、という所にある、といいます。職業的な博打うちになるかそうでないか、で區別ができる、競馬や競輪などでも、思わく屋などゝいつて、これが職業になれば賭博だ、というのです。これも一つの見

方でしようが、私は、人間の知性の操作が入る余地のあるものはまだほんとうの賭博ではない、八百長の入り込む余地のあるものはほんとうの賭博ではない、それは賭博に似た罪惡で、良俗を害する罪はこの方が大きい、賭博とは人間の如何なる知性や判斷をも超えた結果のためにすべてを投げ出すことであります。表が出るか裏が出るか、それについては數學的確率論からいえば、公式があつて、その回數はそれぞれわかつてゐる、しかしこんど出るのは表か裏か、それは知性を超えた偶然であつて人間にはわからないこれに人生を託することが賭博なのであります。

さて初めに掲げた御法語には何かしら賭博的な、思いつめた、すべてを投げ出した氣持が現れているのが讀み取れるではありませんか。同じような御法語をもう一つ引きましよう。

「念佛申さんもの十人あらんに、たとい九人は臨終あしくして往生せずとも、我一人は決定して往生すべしと思ふべし。」

これもまた、一か八かという所まで追いつめられた人の差し迫つた氣持です。信仰は追いつめられた人の決斷であります。知性は表が出るか裏が出るかという最後の判斷の前に躓いて、ついに答えることができません。この時、人間は自己の知性の力のはかなさを知り、これに頼ることの危

うさに氣づき、知性を棄てるのです。これが上人がしばしば仰せられる「一文不知の愚鈍の身」となることであり、「無智の輩どもがらに同じうして」であります。

往生は一定と思えば一定である、往生間違いないのである、不定であると思えば不定である、果して往生するかどうかわからない、心の持ち方一つでいずれとも定まるというのであります。あれかこれか、そのどちらを選ぶかは信仰の決断であります。人間の浅はかな才覺や智恵や思案に頼つていては、この決心はつきません。もし知性の計いに頼つてゐるならば、あれかこれかのどちらかを選ぶ場合、「往生は不定」であると思う方へ落ちてしまいます。というのは、人間的知性の立場からいえば、佛の救いの力、本願力も、極樂も何もかも、宗教の世界はなくなつてしまふからであります。

パスカルという十七世紀のフランスの物理學者で神學者は、信仰に入る道を賭けに譬えて、巧みな説き方をしています。この人の賭けの譬えというのは、神があるかないかという論證を理性に期待しても、得られるはずはない、神の信仰は理性を棄て、神の方へ賭けをすることである、というのです。表が出るか裏が出るか、そんな事は人間にはわからない、「神あり」という表の方を取つて、損得を計つてみよう。もし勝つたら、君はすべてを得るのだ。負けても何も失いはしない。だから躊躇せずに、神有りという方

に賭けたまえ」もし神が有あるという方へ賭けて、神が無かつたとしても、もともとではないか、有つたら大當りだという意味でしよう。信仰は實に人生を賭けての賭博であります。

親鸞はこの信仰の追いつめられた氣持を、賭けの譬喩そのまゝに、次のように述べています、「念佛は、まことに淨土に生るゝたねにてやはんべるらん、また地獄に落つべき業にてやはんべるらん、總じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて、念佛して地獄に落ちたりとも、さらに後悔すべからずさぶろう」(歎異抄)。この言葉には親鸞の「往生ほどの一大事、凡夫の計うべきことにあらず」(執持抄)という知性超越、知性放棄の氣持がよく現れております。

佛の本願こそ誠に不思議であります。法然上人はしばしば、「本願の不思議」をお説きになつています。本願とは如來の大慈力であつて、これこそ不思議であるというのであります。不思議とは人間の考えを超えていること、人間の思索や推理ではどうにもならないことに他ならないのです。

御 禮

今回横濱市鶴見區矢向町良忠寺の森本祐顯師より佐藤賢順氏を通じて、本會へ金二千圓の寄附を頂きました。淨土發刊に努力している私共として、非常に心強く感ぜられ、ありがたく御禮申し上げます。

法然上人鑽仰會

浄土の會員を

一人でも多く

◇どなたでも會員になれます。

◇會費は半年一三八圓、年額二七六圓です。

◇會員には毎月「浄土」を配布します。

◇この會はみなさまの會ですか
らその發展のために、お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰運動をひろめませう。お知合の方々にぜひおすすめ下さい。

◇お申込には振替（東京八二二八七番）を御利用下さい。

芝園だより

◎多忙の中にすごしたこの一年、個人の上にも、日本の上にも、そして世界の上にも、幾變遷をめぐらした。

◎前號の後記で藤田氏の綴られた悲痛な文字も、またわれわれに加えられた無心の波の一寄せであつた。危機を脱せられし愛嬢の枕許を離れがてに看とられる藤田氏に光あらんことを。

◎去る十月、眞野先生の一粒種菜子嬢が、少壯梵文學徒前田龍海氏の良きハーフとなられた喜びは、ひとり私共の間にのみ止めておくべきではないと感じ、遅れ走せ乍ら、ここに御披露申し上げ、御兩人の多幸を切願する。

◎本誌も、本號が如實に示めしている如く、吉田絃二郎先生をはじ

め、浄土を眞に愛し、眞に守つて下さる方々のものとなりました。足立氏は白河市で、森氏は大阪で小川氏も、河野校長も、それぞれ皆さん方のまわりに浄土をひろめ自ら筆をとつて、鞭達して下さつています。まことにありがたく存じます。

◎どうぞ、弘く會員の皆さまも、浄土を思われる時に心に浮ぶそれこれのことを、是非文字に寫してどしどし御送り下されば、それがそのまま、本誌を育てて下さることになるのであります。

◎眞野先生も、本年一年は口舌につくしがたき繁務・重任にあつて思われつつも本誌への執筆が不可能でありましたが、幸い、本年を以つて一應激職も退かれるので、再び吾々のところへお歸りになりました。本誌には、お忙しいなか

から一文を頂きました。又ぞろ次號より振られるであらう麗筆に御期待下さい。

◎では、皆さま、よきお年を。

（竹中）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申上げます。

「浄土」 十二月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿六年十一月廿五日印刷
昭和廿六年十二月一日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

發行所 法然上人鑽仰會

振替 東京八二二八七番
會員番號 B 一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

浄土トラクト既刊

心の糧となる内容、親しみ易い文章、雅味のある装釘、そして誰もが気軽に手にできる廉価——浄土トラクトは各方面に好評をもつて迎えられています。

お十夜の話 藤田寛雅著 賣 切

お彼岸の話 竹中信常著 四圓送六圓

お盆とおせがき 佐藤密雄著 四圓送六圓

文書傳道は現代的要求です。讀むことによつて信仰の歩みを進めてゆく上に、また生活文化としての佛教への常識、教養をたかめる上にも、最適の良書、施本等に御活用下さい。必ず良き心のみのりが得られます。

法然上人鑽仰會